

「もう一ばんとまって、わたくしのお使いをしてくれないか。あの子はとてもものどがかわいていて、お母さんはとても悲しんでいるのだよ」「わたくしは男の子が好きじゃないんです」とツバメは答えました。「去年の夏、川のほとりにいたとき、二人のらんぼうな男の子がおりました。粉引きのむすこたちで、二人はいつもぼくに石を投げつけました。もちろん一回も当たりませんでしたよ。ぼくたちツバメはそういうときにはとてもうまく飛びますし、その上、ぼくはきびんなことでは有名でしたから。でも、石を投げてくるっていうのは失礼なしょうこですよ」でも、幸福の王子がとても悲しそうな顔をしましたので、小さなツバメもすまない気持ちになりました。「ここはとても寒いですね」とツバメは言いました。「でも、あなたのところに一ばんとまって、あなたのお使いをいたしましょう」「ありがとう、小さなツバメさん」と王子は言いました。そこでツバメは王子のけんから大きなルビーを取り出すと、くちばしにくわえ、町の屋根を飛びこえて出かけました。ツバメは、白い大理石の天使がちょうこくされているせい堂を通りすぎました。宮で

んを通りすぎるとき、ダンスをおどっている音が聞こえました。美しい女の子がこいびとと一しょにバルコニーに出てきました。「何てすばらしい星だろう」かれは女の子に言いました。「そして愛の力は何とすばらしいことだろう」「わたくしのドレスがぶどう会に